

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を含めたものです。

カムパネルラ

Vol.15 2010年3月号

- 「その本」と出合うとき・・・齋藤 千映美
- なかまはずれ・・・藤田 博
- おおきくなるっていうことは・・・高橋 里美
- 「ともだち」の大切さを考えさせてくれるこの一冊・・・小野寺 恵子
- 新刊紹介・・・藤田 博

「その本」と出合うとき

齋藤 千映美

今月、小学校三年生の息子が交通事故で入院すると、間もなく、友達のお母様（幼稚園の園長先生）が病院にお見舞いに来て、本を貸してくれました。まんがを持ってきてくれる友達が多い中、本を読むかなと思っていたら、何日かすると「すごく面白かった」と、長いあらすじを私に語ってくれました。それが、なつかしいプロイスラー『小さい魔女』です。その方が貸してくださるのはこれが初めてではなく、今の息子では読まないのではないかと私が躊躇している本を、いつも、不思議なぐらいとて素晴らしいタイミングで紹介してくれるのです。

まったくのところ、息子に本を薦めるのは、難しくなってきました。



幼いころから本の虫だった私は、息子が小学生となった現在まで、数限りないほどの本に触れてきました。忘れられないすてきな本が次々と、いくらでも、浮かんできます。世界のどこにいても本は私の友達でした。私自身、母親にたくさんの良い本を与えられてきたと記憶しています。そこで本のくれる喜びを息子にも伝えたいと、幼い時からずっと、読み聞かせをしてきました。しかし、なぜでしょう。このごろでは、自分が読んでいた記憶から自信を持って薦めた本でも、「意味がわからない」「字が多すぎる」と言われてしまうのです。個性差なのか、時代差なのか、性差なのかと、首をかしげるばかりです。

・・・思い返してみれば、私自身、母親に与えられて何年かもてあましていた（が、やがて夢中になった）「本」はいくらでもありました。当たり前のことですが、子どもにはそれぞれ、その本と出合う“時期”と“出会い”があって、そればかりは親に仕掛けられるものではない、いやむしろ、親の意見を敬遠しているものかもしれないのです。

ラーゲルレーヴ『ニルスの不しぎな旅』は、講談社、偕成社などから出版されている児童文学の古典です。有名なのに、読んだことのある大人が多くない不思議な物語です。悪辣ないたずらをして、妖精の手で小人に変えられたニルスが、ガンの群れとともにラブランドへの渡りの旅に出る冒険物語。こう書くとファンタジー小説に思えるかもしれませんが、そうではありません。物語には全編を通じて、スウェーデンの美しく厳しい自然と澄んだ空気が満ちています。自然の営みやそこに生きる動物たちのたくましさ、実に淡々と、愛情一杯に描かれるのです。物語ではあっても、北欧人である著者の自然へのまなざしが大変現実に映し出されていると言ってよいでしょう。人間も自然の一部として描かれます。感動の最後を読んだとき、読者は何とも言えないカタルシスに包まれ、自然（ファンタジーではなく、リアルな自然）への驚異の念と憧憬を強めるはずで。

打って変って、ノンフィクション(?)のダレル『虫とけものと家族たち』は、残念ながら現在、絶版になっていますが、今でも図書館で読める名作です。イギリス人の少年ジェリー（著者）が、家族と一緒にキプロスに移り住み、穏やかな気候と暖かい住民のまなざしに包まれて、動物少年として立派に(!?)成長していく姿をユーモアたっぷりに描いた半自伝です。少年がキプロスの生きものと人々に注ぐ好奇心と愛情がまっすぐに伝わってくるだけでなく、エキセントリックで才能豊かな家族たちの毎回巻き起こす騒ぎが、全編、笑いの神経を刺激します。ダレルは後に、野生動物保全の活動で有名な「ジャージー動物園」を設立し、同様に楽しいたくさんの本（一部は日本語で読めます）も著しました。

自分のその後に影響を与えたかもしれない2冊を思い出してみましたが、考えてみると、どちらも親に与えられて読んだものではなく、姉と母の本棚から、小学生だった私がそっと抜きとって読んだものでした。何度となく背表紙を目にしていて、ある日ついにそこから取り出したのです。そうやって、自らの意思で選んだ本との出会いが、自分の心をさらに動かしたのかもしれない。それが、「その本」の読まれるべきちょうどよいときだったのではないのでしょうか。

「小さい魔女」オトフリート・プロイスラー作/大塚勇三訳/学習研究社

(環境教育実践研究センター)

「たいくつでいやになっちゃうなあ」、そう言ってクレヨンの箱を飛び出したきいろは、画用紙を見つけると蝶を描きます。きいろがあかとピンクを呼んでくれます。あかはチューリップを、ピンクはコスモスを描きます。あかとピンクがみどりときみどりを呼んでくれます。きみどりはコスモスに、みどりはチューリップに葉を描きます。後に、ちゃいろ、おうどいろ、あお、みずいろがつづきます。「ぼくらのえが できてきたぞ！」くろが聞きます、「ねえ、ぼくは？ぼくは、どこを かけばいいの？」答えは、「くろくんは、まにあってるよ」でした。なかやみわ作・絵『くれよんのくろくん』（童心社）が描き出す、なかまはずれのくろくんです。



「なんで ぼくって、こんないろ なんだろう・・・」シャープペンが知恵を授けてくれます。くろは画用紙一面を真っ黒に。「くろくん！きみ、なんてことを してくれるんだ。」シャープペンが画用紙の上を回転すると、中からあかが、ピンクが、みどりが、色とりどりの花火となって表れます。思わず賞賛の声が、「くろってすごいね。」

ダン・ヤッカーノ作・もとしいづみ訳『ダサイいぬ』（講談社）のいぬは、「おまえみたいな ひどい かお、みたこと ない」とねこから言われるほどのダサイいぬ。オウムからも、金魚からもそう言われるダサイいぬは、「いつもなかまはずれ」です。同じいぬのジャーマン・シェパードからはばかにされ、グレイハウンドからは笑われ、プードルからは、「ねえ、みた？ あの かお！」と言われるダサイいぬです。



隣りに誰か引越してきたようです。しかし、塀が高くて見えません。ダサイいぬは、塀の向こうのいぬに「ゴールデン・レトリバーです。」とうそをついてしまいます。気になるのはバレた後のこと。「ダサイいぬの ぼくを みたら にげちゃうに きまってる」からです。塀の向こうのいぬが塀の下に穴を掘ったことで、二匹は顔を合わせます。目の前にいるのは、自分とすっかり同じ、「正真正銘の」ダサイいぬ。なかまはずれだった二匹は、それだけ余計に「いいともだちに」なれるのです。

新学期を迎えた動物の学校です。チンパンジーが、マントヒヒが、イヌが、ペリカンが・・・います。そこへカモノハシがやって来ます。「さあ まずグループにわかれましょう。きゅうしょくのときのグループよ。ミルクをのむこは あつまれ！」先生がそう言います。「カモノハシくん あなたはここじゃないでしょう。」「はい。でも うまれてからは おかあさんの おちちを のんでいたんです。」お乳を飲むことではそのグループに入れても、卵で生まれていることで外れてしまうのです。「じゃあ しばらく すこしはなれて まんなかにいてちょうだい。」



「つぎは たいそうのときのグループよ。はねと くちばしのあるこは あつまれ。」「せんせい ぼくはどっちに はいればいんですか？」くちばしはあるのに翼がない、くちばしには歯があって、鳥とは違う。「ぼくだけ だれともちがうんです。」先生は音楽の授業をすることに。音楽なら自分にできること、得意なことをして力を合わせられるからです。最後はお絵描きの時間。「はなをつかってかくこ くちばしをつかってかくこ。あしをつかうこ つめをつかうこ しっぽをつかうこ。いろいろです。」ジェラルド・ステア作・ウィリー・グラサウア絵・河野万里子訳『カモノハシくんはどこ？』（福音館書店）は、哺乳類として唯一、卵を産むカモノハシを描いているのです。

くろくん、ダサイいぬ、カモノハシを並べることで「なかまはずれ」の本質が見えてきます。くろくんは同じ箱に入った同じクレヨン、まったく同じ、同じであることがわかっているからこそそのなかまはずれです。ダサイいぬとねこや金魚から言われたくない、それはその通りとしても、いぬから言われる方がはるかに堪えます。同じいぬだからです。くろくん、ダサイいぬが、「同じ」内なるものを外へと出そうとするなかまはずれなのに対して、外から内へ入ることができるかどうか、向きを異にするなかまはずれがカモノハシなのです。

「くれよんのくろくん」なかやみわ作・絵／童心社

「ダサイいぬ」ダン・ヤッカーノ作・もとしいづみ訳／講談社

「カモノハシくんはどこ？」ジェラルド・ステア作・ウィリー・グラサウア絵・河野万里子訳／福音館書店

（英語教育講座）

おおきくなるってことは

高橋 里美

おおきくなるってことは ようふくが ちいさくなるってこと
おおきくなるってことは あたらしいはが はえてくるってこと



おおきくなるってことは まえより たかいところに
のぼれるってこと
おおきくなるってことは たかいところから
とびおりられるってこと
それもそうだけど とびおりても だいじょうぶかどうか
かんがえられるってことも おおきくなるってこと

靴がきつくなったから、新しいの買ってもらったんだよ！

先生、見て、見て！昨日ね、歯が抜けたんだよ。全部で6本抜けたよ。

などなど、昨日とは違う自分に喜びを感じ、それを話したくてしかたがない子どもたちです。特に、4月に出会った年長の子どもたちは、幼稚園の中で一番のお兄さん、お姉さんになったことがうれしくて、誇らしくて、「これからどんなことができるようになるのだろう」と期待に胸を膨らませているようでした。これは、そんな子どもたちとどのような出会いをしようかな、どのように生活していこうかなと考えていたとき、同学年を一緒に担当することになった先生から、「今の時期の年長さんにぴったりだと思よ」と紹介された絵本です。

「おおきくなるってことは・・・」のフレーズの後に、子どもたちが「うん、うん。私にも同じことがあるよ」「ぼくだって、シャンプー嫌だって言わないよ」など、子どもたちが実際に経験したことのある事柄が、繰り返し書かれています。リズムカルに繰り返されることでこのフレーズは、子どもたちの耳に心地よく残るようでした。この絵本を読んでから、普段の遊びの中や生活の中で、

大きくなるってことは、友だちと工夫して遊べるってこと

大きくなるってことは、お片付けが上手になるってこと

など、今の自分たちならではのことばを入れて話をするようになったのも、覚えやすいフレーズだったからに違いありません。

もう少しで幼稚園を卒園して、小学校へ行く年長の子どもたち。幼稚園児から小学生へ、また一つ大きくなる子どもたちともう一度、一緒に読んでみたいと思います。

「おおきくなるってことは」中川ひろたか・文／村上康成・絵／童心社

(附属幼稚園 年長児担任)



「ともだち」の大切さを考えさせてくれるこの一冊

スーザン・パーレイ作・絵 / 小川仁央訳 『わすれられない おくりもの』(評論社)

小野寺 恵子

スーザン・パーレイ『わすれられない おくりもの』は、物知りで、人望の厚いアナグマが、後に残していくともだちを気に掛けながら、静かに死を迎えるところから始まります。慕ってきたアナグマの死に、誰もが悲しい気持ちになります。しかし、アナグマは「おくりもの」を残していたのです。モグラにはハサミの使い方を、カエルにはスケートのすべり方を、キツネにはネクタイの結び方を、ウサギには料理の仕方を・・・それぞれがいま特技としているものは、どれも、アナグマが教えてくれたことでした。



アナグマの「おくりもの」には、共通点があるのがわかります。ハサミがつくり出すのは、「手をつないだ、モグラのくさり」、ネクタイは、文字通り結び方、そして、凍りついた川でのスケートは時間が止まっていること、しょうがパンの焼き方は、時間をかけるものとしての料理。そこに見えているのは、つなぎ、結ぶことと円環的時間です。「おくりもの」の思い出を語り合い、アナグマの思い出を語り合うことで、モグラが、カエルが、キツネが、ウサギが「ともだち」として結ばれるのです。

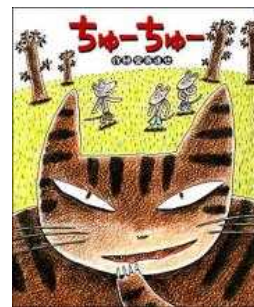
春は別れと出会いの季節です。いまの「ともだち」とこれから出会う「ともだち」、どちらも大切にしていきたい、そして、私自身も誰かの素敵な「ともだち」でありたいと思わせてくれる一冊です。

(国際文化専攻4年)

新刊紹介

宮西達也作・絵 『ちゅーちゅー』(鈴木出版)

「ちゅーちゅー」鳴きながら、三匹のこねずみが野原で遊んでいると、ねずみ村の村長さんが、「おおきな こえを だしているよ。ねこがくるよ。たべられちゃうぞ。」と注意します。こねずみもよくわかっています。そこへねこがやって来ます。「たべられちゃう」はずの怖いねこが発したの、「おまえたち だれだ?」の拍子抜けする一言。これにつづく、「おじさん、ねずみ みたこと あるの?」「ねずみを しらない わけ ないだろ」が奇妙なのは、ねこがねずみを知らないはずはないと思えるからです。ねずみに近づくための演技、うそに思えて当然です。しかし、このねこは本当に知らない、知らないそこから信じ難い関係が生まれるのです。捕食関係にある動物同志から生まれる奇跡とも思える関係、思い出されるのは、やぎのメイとおおかみのガブの物語、木村裕一『あらしのよるに』(講談社)です。違いがあるとすれば、向かい合っているねこことねずみには闇という名の壁がない、ねこの無知が壁の役目を果たしていることです。



『ちゅーちゅー』って というのは 『だいすき』って いう いみさ。」ねこを騙すねずみのうそが、思わぬものを引き出します。ねこは「むねの なかが ぼっと あたたかくなるのを かんじ」たのです。「ぼくたち おじさんの ことも すごく『ちゅーちゅー』だよ」は、取りに出かけたバナナを「もう いっぱい たべよう」へとつながります。ねこはバナナの木から落ちてしまいます。足を滑らせたねずみを助けようとしたためです。ぴくりともしないねこ。「だ、だれかに知らせなくちゃ」「ちゅーちゅー」と鳴けばねこが来るのはわかっています、わかっているからこそ鳴くのです。二匹のねこがやって来るのを見たねずみは、「よかった!で、でも たいへんだ!」そう叫んで逃げていきます。

「おじさん、うそを ついて ごめんね」、泣きながら走るこねずみの頭上に星がまたたいています。「ちゅーちゅー ちゅーちゅー ちゅーちゅー・・・」遠くからねこの声が聞こえてきます。「ちゅーちゅー」三匹もそれに応えます。うそであった「ちゅーちゅー」の意味が本当に変わっているのは言うまでもありません。そして、聞こえてきているのが、星になったねこからのものであるのも言うまでもないのです。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館